

Fujino Omori

大森藤ノ

Illustration
はいむらぎよたか
キャラクター原案
ヤスダスズヒト

ダンジョンに
ジョンを求めるのは
出会いを求めるだけ
間違えるだけ
外伝

4

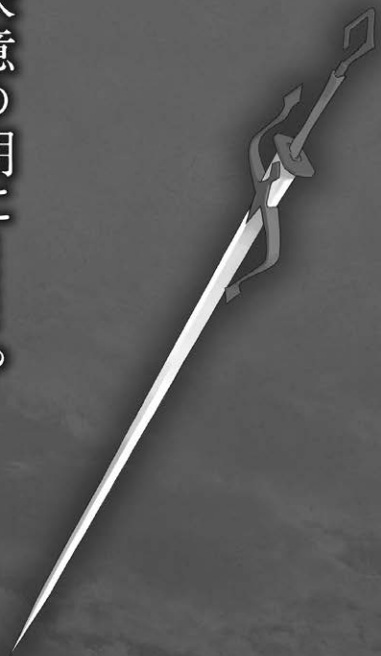
ソード オラトリア

Sword Oratoria



プロローグ

決意の朝に………？



Гэта казка іншага сям'і.

І …… раніцай рашэннем?

カバー・口絵 本文イラスト
はいむらぎよたか

空が闇に包まれている。

東の空から夜明けが始まるどころか、西も北も南も、頭上も真つ暗だ。

日付が変わってから時間が経ったとはいえ、朝と呼ぶにはほど遠い刻限。

常日頃と比べても格段に早い時間帯にアイズは目覚め、この市壁——迷宮都市を囲う巨大

壁の上に来ていた。

「……ね、眠い」

かもしれない、と呟くその姿は、迷宮探索に装備していく軽装に愛剣《デスペレート》。

銀の防具と銀の剣を纏う金髪金眼の少女の、その双眸は少々眠たけであった。

彼女の視線の先では巨大市壁から見下ろせる広大なオラリオの街並みが広がっており、星の海のように散らばっていた魔石灯の光は多くが消え失せ、静謐を帯びつつある。未だ明かりが

絶えないのは南のメインストリート——大劇場や賭博場が存在する賑やかな繁華街に、東側

に隣接する『夜の街』歓楽街、そして昼夜問わず魔石製品を生産するため稼働し続けている北

東区画の工業区くらいだ。

今もまた数粒の光が消えた雄大な迷宮都市の景色を、アイズはぼうつと眺める。

「……」

冷たい夜気に身を委ねるように目を閉じ、眠気を吹き飛ばそうとする。それと同時に彼女の
 瞼の裏に浮かぶのは、今自分がこうして市壁の上にいる経緯だった。

まだ昨日の今日、アイズはとうとう白髪の少年ベル・クラネルに謝罪の言葉を告げることに

成功した。ミノタウロスの騒動から始まった少年への思いを伝えた彼女は、和解、とは異なる

が誤解も解けたことで、少々不毛であった兎との壮絶な追いかけっこに幕を閉じたのである。

しかし、それでアイズと少年の関係は終わらなかった。

目標のために強くなりたいというベルから、アイズは師事されることになったのだ。

未だ零細【ファミア】の唯一の団員である彼には戦い方を教わる冒険者の先達がいない。

我流という名の、悪く言えば素人のままでダンジョンにもぐり続けていると、少年は真つ赤に

なりながらしどろもどろに語った。

アイズはそんな彼を見かね、戦闘技術の伝授を自ら申し出たのだ。

君のひた向きさに共感し、突き動かされた。

アイズは他派閥の団員に手を貸すような真似について、少年へそう説明した。

それは間違っではないが——真実でもない。

アイズがベル・クラネルの教導役を申し出たのは、目を見張るほどのその『成長』の秘訣を

知るためだ。

冒険者になつてまだ一カ月しか経っていないというベルの成長速度は並ではない。アイズの

関心を驚嘆みにして振り向かせるほどの実績と戦果が確かに存在している。既にダンジョン

「上層」深部に到達してみせた彼の成長方法を、アイズはどうしても探りたいのだ。

「上層」深部に到達してみせた彼の成長方法を、アイズはどうしても探りたいのだ。

「上層」深部に到達してみせた彼の成長方法を、アイズはどうしても探りたいのだ。

一週間後に控える『深層』59階層への進攻のため。その正体を暴露した人と怪物の『異種混成』、怪人レヴィスの脅威に屈しないため。そして、己の悲願のために。

強さを貪欲に求めるアイズは、ベル・クラネルの成長を知り、更なる高みへの飛躍を望んでいる。

(けど、それは……)

同時にそれは、アイズのしたたかな、ともすれば醜い打算でもある。

アイズが純粋な善意で己に戦闘を教えると信じて疑っていない少年に、本当のことを言わず、嘘をついているのだ。

湧き起ころるのは罪悪感である。

回想から戻り、臉を開けたアイズは金の瞳をそっと伏せた。

銀の鎧に包まれた胸がずきずきという疼痛を放つ中——せめて報いなければ、と言いつつ、ように、そして切に思う。

悲願のために自分は少年の『秘密』を探ることは絶対に止められない。

ならば、彼の言う目標の手助けをしよう。

罪滅ぼしにはならない、ただの自己満足だ。

だが自分が少年に払える対価を全て差し出そうと、アイズはその誓いを疼く胸に刻んだ。

兎のような深紅の瞳を思い出しながら、愛剣の柄に触れ、きつと顔を上げる。

そう、罪悪感を引きずってはられない。自分は今日、ベルに戦闘の指導を行うため早くから目覚め——誰にも見つからないであろうこの市壁に赴いたのだから！

「頑張らなくちゃ……」

いつかのように心の中の幼い自分に声援を送られる中、むんつと気合を入れ直す。

アイズが訓練の場所を選んだこの都市北西の市壁上部は、以前彼女が見つけた『秘密基地』だった。封鎖されている筈の市壁内部の出入り口を発見したのは【ロキ・ファミリア】に入団したての頃。幼かったアイズは団員達と衝突——主にリヴェリアとの一方的な喧嘩——をする度に、ホームを飛び出してこの市壁に潜伏していたのだ。

市壁内部には何者かが住んでいた形跡があり、何とシャワー等の生活空間、石部屋が存在している。耳にした噂程度だが、使われなくなった教会に無理矢理住み込む女神もいるオラリオのことだ、この市壁にも名も知らない神か、あるいは浮浪者が住み着いていたのかもしれない。

【ロキ・ファミリア】幹部である自分が他派閥の人間と接触している事実は、例えティオナ達仲間にもバレてはいけない。

すぐに止められ、怒られ、説教され、少年の手助けどころではなくなるだろう。

摩天楼施設を除けば都市建造物のほとんどより背が高いこの巨大市壁ならば、そう簡単には

密会が明るみにならない筈である。

「……でも」

ベルに報いるため、明らかに市壁へ早く来過ぎたアイズのやる気は満々だった。

というより、緊張にも似た感情が胸を震わせ寝付けなかった。ベッドにもぐりこんだアイズの双眸はぎんぎんとなって中々閉じなかつたのである。

今もわくわくかどきどきかよくわからない鼓動の音を抱えながら、来るべき瞬間に備えているアイズは、しかし。

市壁の石畳に視線を落としながら、ぼつり、と眩いた。

「何を、教えよう……」

やる気は満ち溢れている。だが肝心な指導の内容が思いつかない。

今日まで己を研鑽し続けてきたアイズである、自分のことばかりで戦い方など誰かに教えた経験はなく、むしろ【ファミリア】の先達——フィンやガレス、リヴェリア達について数年前まで教わってばかりだった。

そんな自分が、教導。

自ら言い出しておきながら、アイズは途轍もない違和感を抱いていた。

具体的に、何を教えればいいのか？

誰にも聞けない疑問を、そして心の中の幼い自分も知らぬ存ぜぬでベッドに入り込んでしま

う問いを、アイズは視線を左右に揺らしながら持てあます。

昨日からずっとさまよい続けている心の迷宮は、未だに突破できる兆しが見えない。

鍛練開始間近になっても途方に暮れている金髪金眼の少女のもとを、夜と朝の境目に吹く冷たい風が、笑い声を上げるように音を立てて通り過ぎていく。

間もなく、くしゅんつ、と。

うんうん唸っていたアイズは、小さなくしゃみをした。

前章

そして
少年は



Гэта казка іншага сям'і.

Іхлончык

都市全体がすっかり寝静まっている時間帯。

【ロキ・ファミリア】ホーム、黄昏の館は全ての部屋から光が消え失せていた。

長郎とも呼ばれる館の周辺は闇が濃い。正門前では、主神から『せんでいいっちゅーに』と言われているにもかかわらず団員達が二名ずつ門番を務めている。今もまた男女二名のヒューマンからエルフと獣人の少女達が交替を果たした。館の内部では、廊下に灯されている魔石灯が燭台の炎のように不安定に明かりを揺らしている。

そして、槍衾のように尖塔が互いを補充し合うホームの屋内。

女好きの主神が勧誘した見目麗しい少女達が暮らす、とある女子塔の一基で。

むくり、と起き上がる一つの影があった。

寝台から上体を起こした影はフリルをあしらった可愛らしい寝衣に包まれた細い足を床につく。カーテンが引かれた窓の外と同様、暗闇に包まれている部屋の中にこそこのように衣擦れの音が響いていった。

眠りこけている同室の女性団員を起こさないよう着替えを終えた影は、そっと扉を開けて部屋を出る。

「こんなに早起きしちゃった……」

しっかりと結わえた山吹色の長髪を揺らし、自室から出たレフィーヤは呟いた。

レヴィス達怪人との交戦、24階層の激闘から既に四日。

当時の戦闘中に陥った精神疲弊の影響で、約三日間自室で寝たきりだったレフィーヤの目はすっかり冴えていた。体もすっかり快調となり、もはや寝られぬと彼女は突ったエルフの耳をびくびくと揺らし、音を立てないよう手狭な廊下を歩んでいく。

（せっかくだし……今から何か訓練を！）

胸の前でぐつと両手で拳を作るレフィーヤはやる気に満ちていた。

24階層の事件を経てあらためて思い至った己の不甲斐無さ。【ファミリア】の先達の足を引っ張らないためにも、そして己のためにも、もっと強くならなくてはと思い新たなにする。

その紺碧の双眸は闘志に燃えていた。

（それに……今からならアイズさんと一緒に訓練ができるかも！）

が、凛々しく構えられていたエルフの整った容姿がほにやつと緩む。

レフィーヤの憧れる金髪金眼の剣士は毎日朝早く起床し、剣の素振り、朝の鍛練を欠かさない。このままいけばアイズと一緒に時間を過ごせるやも、とほんの少々、いやかなりの下心を携えるレフィーヤは心なし弾んだ足取りを刻んだ。

レフィーヤこんな朝早くからすごいね、そんなことないですよアイズさん私はまだまだ未熟者なんですからこんな当たり前ですエへもつと褒めてください、と頭の中の妄想に浸る少女は、現実でも「えへへっ」と同じ弛緩した表情を浮かべる。

ご機嫌な彼女は、いつもアイズが素振りをしている中庭を目指した。

「えーつと……やつぱり、早過ぎちゃったかな」

まず向かった尖塔間を繋ぐ空中回廊から中庭を見下ろすが、金髪金眼の少女の姿は見当たらない。設けられている魔石灯のポールも消灯した暗い芝生の庭を見渡し、レフィーヤは小首を傾げる。未だ時計の短針は三の数字にも届いていない時間帯だ、流石のアイズも起きていない可能性は大いにある。

石造りの渡り廊下でうーんと思考に耽るレフィーヤは、初心に立ち戻り、一人で訓練を始めようと動こうとした。

「えっ……アイズさん？」

その時、レフィーヤの瞳がアイズの姿を視認する。

中庭ではなく、塔と塔の間の奥、ホームの裏手側。軽装を纏いしつかり帯剣もした彼女はきよるきよると顔を左右に振った後——音もなく跳躍し、館を囲む高い塀を飛び越えていった。

「!?」

門も通らずホームから抜け出す真似をしたアイズに、紺碧の瞳がぎよつとする。

不審な素振りを始めその一部始終を目撃していたレフィーヤは、まさか迷宮探索に向かうつもりだろうか、と慌てて金髪金眼の少女の後を追跡する。

高い位置にある渡り廊下から飛び降り、ホームの庭へ。

杖を取りに戻る時間も惜しみ、疾走からの助走をつけて、自らも塀を飛び越えた。



闇がはびこり肌寒い冷気が漂う街路を走る。

アイズの後を追うレフィーヤは、彼女の進路が都市中央、ダンジョンの大穴を塞ぐ摩天楼施設ではないことにすぐ気付いた。

既に見失いつつある金の長髪の後姿は、どうやら北西の区画を目指しているようである。
(こんな朝早くから、どこへ……?)

うつすらとした白い呼吸を夜闇に溶かしながら、レフィーヤは必死に走った。

道行くほんの僅かな亜人や路上に転がり泥酔している冒険者達から悪戦しながら情報を聞き出す彼女は、アイズの足跡を追い続ける。

だがその頑張り虚しく、とうとう完璧に見失ってしまった。

都市北西部の市壁付近で、息を切らすレフィーヤは足を止める。

「こつちに来たと思うんだけど……」

人家に囲まれた石畳の通り。洒落たポール式の魔石街灯が等間隔に立っているのを見回しながら、レフィーヤは再び走り出した。

メインストリートを外れ、広く整然とした裏通り、更に複雑な小径へ。

もはや闇雲に探し回るレフィーヤは数十分以上も迷路のように枝分かれした道と格闘した。自分は一体何をやっているんだろうと思いつつ、アイズ探しを止められない。そして更に時間が経過した頃。

顔を振って少女の搜索に夢中になっていたレフィーヤは、曲がり角から飛び出してきた影と衝突した。

「きゃっ!!」

「うわっ!!」

ごっくん! と見事に頭と頭をぶつめたレフィーヤ達は、二人して尻餅をつく。

頭を押さえ、あるいは涙目になってお互い悶えること数秒。

ふ、不覚っ……!! とLv.3であるにもかかわらず晒した醜態に、少女のことしか頭になかったレフィーヤは己を恥じた。

「ご、ごめんなさっ——」

「すっ、すいませんっ!!」

謝ろうとするこちらの言葉を大声が遮り、目の前にいた相手は慌てて立ち上がる。

顔を上げた先にいたのは、白髪の少年だった。

深紅の瞳のヒューマン。

相貌はあどけなく、その純白の髪は故郷の冬の森、エルフの里を彩る白雪をレフィーヤに



思い出させた。派閥の男性団員達と比べれば中性的で、顔や体の線は細い。

自分と年が近いのではないかと思うレフィーヤを他所に、少年は手を差し伸ばしてくる。

「大丈夫ですか……あ」

その伸ばされていた手が、不意に動きを止める。

こちらの顔を見てはつとする彼の瞳には、ぴくぴくと動く尖ったエルフの耳が映っていた。

【ディオニユス・ファミリア】の少女がそうであったように、誇り高いエルフは己が認めたい者以外の肌の接触を嫌う。種族全てに当てはまるわけではないが、その習性を矯正できない者達が多いのも事実だ。

少年は件の風習を知っているのか、差し伸べた手を引つ込めるのかどうか逡巡していた。

困った表情を浮かべているその姿にレフィーヤは軽く息をつく。

同胞が勘違いされるのも嫌なので、自らその手を取った。

驚く少年の手を借りて立ち上がる。

ばんばんと服から埃を払ったレフィーヤは、その深紅の瞳と目を合わせた。

「ありがとうございます。それと、ごめんなさい、よそ見をしながら出てきて」

「い……いえっ!? こちらこそっ、急に出てきて……!」

微笑みながら謝るレフィーヤに、少年は言葉に詰まりながら応じる。

あまり女性に免疫がないのか、エルフであるレフィーヤの整った容姿に頬を染めながら若干

居心地が悪そうにしている。

腰が低く、どこか純朴そうだ。軽装を纏った身なりからして冒険者なのだろう。

そこまで察したレフィーヤは、そうだっ、と探し人のことを思い出した。

身を乗り出しながら少年にアイズの特徴を伝え、見なかつたかどうか尋ねる。

「金の髪に、金の瞳……?」

「そうです! 【剣姫】です! 【剣姫】アイズ・ヴァレンシユティン!! あなたも冒険者なら知っていますよね!! 見かけませんでしたか!」

つい興奮したレフィーヤのその言葉に。

少年は静かに、一筋の汗を流した。

「あ、あの……貴方は、【ロキ・ファミリア】ですか?」

「……っ? そうですけれど?」

何を数から棒に、と訝しげな顔を見ると、少年は口端を引きつらせる。

まるでバレてはいけない秘密を抱えているかのように……ダラダラと汗を流し始めた。

まさか、と顔色を変えるレフィーヤは、怪しいっ、と両の睨を吊り上げる。

この冒険者は——隠し事をしている!

「あなたっ、アイズさんのことを何か知っているんですか!」

レフィーヤが吠えた、次の瞬間。

少年はぐるんつと背を向けて、逃走した。

「ああつ!？」

白髪をなびかせながらまさに脱兎のごとく走り出す少年。

レフィーヤの唇から素つ頓狂な声が打ち上がる。

鮮やかな逃げ足を披露するヒューマンの少年に、エルフの少女も矢のように駆け出した。

「待ちなさいあ——いっ!!」

「いいいいいいいいいっ!？」

未だ寝静まる都市の片隅で、猛烈な追いかけつが始まった。

スタートダッシュで離れた筈の距離をあつという間に半分まで埋められ、肩越しに顔を振り向かせた

少年は驚愕の声を上げる。

見たところ少年はL.V.1の下級冒険者、魔導士といえどL.V.3のレフィーヤの脚力の前では無力だ。その差をぐんぐんと縮めていく。

あの様子——アイズがこんな都市の端っこに訪れている理由を絶対何か知っている。

レフィーヤはそう直感する。心優しそうで丁寧、純朴そう、という少年の評価を翻し、『無礼者かつ不届き者』と剣姫を崇拜する少女は認識をあらためた。

尖った紺碧の瞳が、必死に逃げ惑う白兎を照準する。

「ひいいいいいいいいいっ!？」

「このつ……!？」

出鱈目に走り回り、入り乱れる小径を何度も曲がる少年との間合いが中々詰め切れない。

全力疾走を続けて思いのほか粘るその背中に、レフィーヤは心の中で叫んだ。

——逃げ慣れている!

あなたも迷宮街に鍛えられたかのような錯綜する路地裏の利用方法、そして逃げ足の瞬発力。L.V.1にしてどんな怪物達に追い回されてきたのか問い詰めたくなるほどの逃走振りに、レフィーヤは手を焼かされてしまう。

だが、間合いはもう五Mを切っている。

どうあがいてもここからでは振り切れない。

もう追いつく!と確信するレフィーヤは、少年が曲がった突き当りの道に飛び込んだ。

「えっ……いい、いないっ!？」

視界が新しい小径に切り替わった瞬間、少年は忽然と姿を消していた。

どこへ!と仰天し焦るレフィーヤは、側にある横道を発見し、両手を懸命に振って再び駆け出す。

アイズにまつわる事柄で冷静さを失っていた彼女は、状況把握を怠ってしまった。

建物の陰が作り出している小道からの死角、小さな空間。

その場に設けられた古びた石井戸が、ひとりで、釣瓶と滑車をガタガタと揺らした。



「あ……おはよう」
 「はあ、はあ、はあ……!? おつ、おはようございますっ……!!」
 「……何か、あったの?」
 「い、いえっ、ちよつと森の妖精ようせいに追いかけて……!」
 「よう、せい?」
 「すごく綺麗きれいで、すごく恐ろしくて……!!」
 「え、えっと……大丈夫?」
 「少しっ、休ませてもらっていいでしょうか……!?」
 「う、うん」
 激しい鍛練が始まる前の、市壁の上での一幕であった。

試し読み版はここまで!
 続きは本編にてお楽しみ下さい!

試し読み版

ダンジョンに出会いを求めるのは 間違っているだろうか外伝 ソード・オラトリア 4

発行 2014年5月31日 初版第一刷発行
 著者 大森藤ノ
 発行人 小川 淳

発行所 SBクリエイティブ株式会社
 〒106-0032
 東京都港区六本木2-4-5
 電話 03-5549-1201
 03-5549-1167 (編集)

装丁 株式会社ケイズ (大橋勉/菅田玲子)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
 本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを
 することは、かたくお断りいたします。
 定価はカバーに表示してあります。
 ©Fujino Omori